

氏名(本籍)	む 武 蔵 由 佳 (岩手県)		
学位の種類	博 士 (心 理 学)		
学位記番号	博 乙 第 2291 号		
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	大学生に対する構成的グループ・エンカウターの手法を活用した心理教育的援助		
主査	筑波大学教授	教育学博士	新 井 邦二郎
副査	筑波大学教授	教育学博士	徳 田 克 己
副査	筑波大学助教授	博士(心理学)	濱 口 佳 和
副査	筑波大学教授	教育学博士	桜 井 茂 男

論 文 の 内 容 の 要 旨

(目的)

大学生の諸問題として、留年や退学、スチューデント・アパシーなどの不適応現象が取り上げられ個別の支援を必要とする大学生の存在が指摘されてきた。大学側も不適応の大学生のための個別支援とともに、“いわゆる普通の”大学生の心理社会的発達を促進するような心理教育的援助を充実させることが求められている。心理社会的発達を促進することを意図したプログラムとして、構成的グループ・エンカウター(Structured Group Encounter : SGE)がある。SGEは、自分探しを積極的に行う大学生への成長促進的援助として、さらに新しい人間関係のきっかけ作りやリレーション形成、自他の相互理解、相互啓発の体験学習の道具として、大学生の心理社会的発達を促進するための援助方法として有効であると考えられる。本研究は、大学生に対する心理教育的援助の開発的方法としてSGEの展開の仕方、つまり“構成”の規則性とその有効性について検討し、大学生の対人関係形成を促すプログラムを作成し、そのプログラムを実施したことが大学生の心理社会的発達を促進することを実証することを目的とする。

(対象と方法)

本研究は、7つの研究から構成され、研究1～5までが質問紙による調査法と面接法を実施した。研究6～7は、作成したプログラムの介入効果を検討したアクション・リサーチであった。対象は3大学の1～4年生であった。質問紙による調査法と面接法の実施は次のように行った。大学生に自我同一性地位判定尺度を実施し、6つのアイデンティティ・ステータス(A:同一性達成地位、B:同一性達成-権威受容中間地位、C:権威受容地位、D:積極的モラトリアム地位、E:同一性拡散-積極的モラトリアム中間地位、F:同一性拡散地位)に分類した。その後、大学生の特性や心理社会的発達の実態把握をするため横断的調査を行い、アイデンティティ・ステータスの視点から検討した。さらに、大学4年次に面接を行い、アイデンティティ・ステータスの時間的変化と心理的变化について縦断的調査を行った。また、他者との関係性に関連した変数として、親和動機を取り上げ、SGEのプログラムとメンバー構成の仮説を生成した。その後、仮説に基づいて構成されたSGEの実践を試み、アイデンティティ・ステータス尺度と親和動機尺度、面接調査から大

学生の心理社会的発達の変容について明らかにした。

(主な結果)

SGE 実施前後のアイデンティティ・ステータスの変容を検討したところ、① E 地位の学生のアイデンティティ・ステータスの成熟を促す側面があることが明らかになり、このアイデンティティ・ステータスは、② E 地位から D 地位への移行が多く、さらに SGE 実施 6 ヶ月後に、参加した大学生に半構造化面接を行ったところ、③ SGE を体験した大学生は、自己受容、自己表現、自己発見など“自己”に関連する領域、他者受容・信頼・被受容感、他者意識などの“他者との関係性”に関連する領域、人間観、日常生活との関連、葛藤・抵抗など“その他”の 3 つの領域において変容があると捉えていることなどが明らかになった。

(考察)

本研究の対象である E 地位の学生は、積極的に具体的な職業選択に向けて行動ができにくく、「将来、自分は何がしたいのか分からない」という状態にある学生である。SGE により大学生の対人関係を促進するきっかけ作りを行い、それが日常生活の中に般化され維持される中で、他者から受容されたり、他者との同一化体験を持つことで自己受容が促されたり、他者から見られる自己像と自分で認知する自己像の一致について確認したりして、最終的に学生の心理社会的発達が促進するのではないかと考えられる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、大学生に対する心理教育的援助の開発的方法として SGE を活用するために、SGE のプログラム、メンバーなどの“構成”について検討し、SGE を実施する際に、リーダーは参加するメンバーがどのような発達段階にあるのかをアセスメントし、その参加者が集団体験を通して直面している発達課題を解決したり、その段階からより成長できるようなねらいや目的を設定したりすることが必要であることを提起できたことは評価できる。また SGE を実施する際に、どのような学生にどのような“構成”をすると、よりねらいや目的が達成されやすくなり、メンバーの心理社会的発達が促進するのか、そして何種類かのエクササイズを組み合わせて、さらに効果的にねらいや目的を達成しようとする場合に、エクササイズの順序やグルーピングはどのように配置すればよいのか、について具体的な資料を明らかにできたことも評価できる。今後は、より厳密な効果検討や大学生支援の主流になっているキャリア支教育の支援と本研究のような対人関係の援助との関連付けをしていくことが、課題であると言えよう。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。